C 150　肥満男児の体型の特徴について

福岡県立大　○白石美恵　小松啓子

成人肥満では体脂肪の分布から体型を分類し、ｳｴｽﾄ/ﾋｯﾌﾟ比が0.7以上となると動脈硬化が促進されやすいことが報告されている。ところで小児肥満の70～75%もが成人肥満に移行するといわれているが、肥満児の体型について詳細に検討した報告は少ない。そこで今回、肥満男児を対象に身長、体重の計測と同時に首囲、胸囲、腹囲、臍囲、腰囲、大腿囲、下腿囲、足首囲及び上腕囲を実測し、各体囲の実測値を年齢別標準値と比較し、肥満の程度と体型との関係について検討した。さらに腹囲の増加率を基準に体型を分類し、体型と肝機能との関係についても検討を加えたので報告する。

〈対象及び方法〉　産業医科大学肥満児専門外来を受診した単純性肥満男児（中等度32例、高度35例）を対象に、初診時に上記の計測部位について同一計測者により計測した。胸囲、腹囲、腰囲、大腿囲、下腿囲及び上腕囲については日本人の体力標準値（東京都立大学身体適性学研究室編）を用いて年齢補正を行い、標準値に対する増加率を算出した。

〈結果及び考察〉　肥満度と首囲、胸囲、腹囲、臍囲、腰囲、大腿囲、下腿囲及び上腕囲との間には有意な相関関係が得られた。中等度肥満では他の体囲に比し大腿囲の増加が、高度肥満では腹囲及び臍囲の増加が著しく、肥満の程度によって体型が異なることが明らかとなった。肥満児を腹囲の増加率により30%未満、30～40%未満、40～50%未満及び50%以上の4ﾀｲﾌﾟに分類すると、腹囲の増加率の上昇に伴い肝機能異常の頻度が高くなる傾向が認められた。

以上の成績から肥満の程度が高い肥満男児では腹部に体脂肪が顕著に貯留することが示唆された。